

学位論文要約

社会科黎明期のカリキュラム論の思想と原理  
—創設メンバーの社会科教育観の諸相と形成要因—

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 学習開発学分野  
カリキュラム開発領域

D175027 大野木 俊文

## 論文目次

序章 本研究の目的・意義・方法	第二節 「総合」を焦点とした上田薫と勝田守一の社会科教育論
第一節 研究主題	第三節 「分化」を焦点とした上田薫と勝田守一の社会科教育論
第二節 本研究の意義と特色	第四節 「内容原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界ー上田薫と勝田守一の学問的アプローチの比較ー
第三節 研究方法と論文構成	
第一章 社会科黎明期のカリキュラム論の類型化	第四章 「方法原理型」カリキュラム論の展開と思想的特質ー「コア」と「問題解決」を焦点とした上田薫と馬場四郎の社会科教育論ー
第一節 カリキュラム論の歴史的背景	第一節 本章の目的・意義・方法
第二節 カリキュラム類型化の先行研究の検討	第二節 「コア」と「問題解決」を焦点とした上田薫の社会科教育論
第三節 本研究の類型化の指標	第三節 「コア」と「問題解決」を焦点とした馬場四郎の社会科教育論
第四節 カリキュラム論の3類型	第四節 「方法原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界ー上田薫と馬場四郎の学問的アプローチの比較ー
第二章 「目標原理型」カリキュラム論の展開と思想的特質ー「人間形成」と「道德教育」を焦点とした上田薫と重松鷹泰の社会科教育論ー	終章 社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界ー創設メンバーの学問的アプローチの比較ー
第一節 本章の目的・意義・方法	第一節 本研究の総括
第二節 「人間形成」を焦点とした上田薫と重松鷹泰の社会科教育論	第二節 本研究の結論
第三節 「道德教育」を焦点とした上田薫と重松鷹泰の社会科教育論	第三節 本研究の成果
第四節 「目標原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界ー上田薫と重松鷹泰の学問的アプローチの比較ー	第四節 今後の課題と展望
第三章 「内容原理型」カリキュラム論の展開と思想的特質ー「総合」と「分化」を焦点とした上田薫と勝田守一の社会科教育論ー	主要参考文献
第一節 本章の目的・意義・方法	

## 論文要約

### 序章

第一節では、研究主題を示した。本研究の目的は、社会科黎明期のカリキュラム論の思想と原理を明らかにすることである。社会科黎明期では、どのようにカリキュラム論が展開されたのか。また、カリキュラム論には、どのような思想的特質と限界が内在していたのか。本研究は、文部省の初等・中等社会科委員会のメンバー（以下、創設メンバー）の社会科教育観の諸相と形成要因を、実証的・総合的に究明する。

ここでいう「黎明期」とは、新教科である社会科が始まろうとしていた時期を意味する。具体的には、1945年から1958年の社会科学学習指導要領が登場するまでの間を指す。従来の社会科教育史の領域では、学習指導要領の変遷に合わせて、カリキュラムの「構成」や「構造」を解明しようとするところに問題意識があった（木村，2006）。それに対して、本研究の問題意識は、カリキュラムを流動的なものとみなし、「理論」を解明するところにある。

日本社会科の原型ともいえる昭和22年版と昭和26年版は「試案」であったことから、逆コースを契機にカリキュラムのあり方をめぐって様々な論争が巻き起こっていた（船山，1964）。また、創設メンバーは現場の教師の自主性や主体性を尊重していたことから、全国各地で多種多様な実践が行われていた。カリキュラム論を明らかにすることで、このような多種多様なプランや授業を生み出すに至った思想的特質と限界を解き明かすことができる。ここでいう「思想的特質」とは、カリキュラムの理論に内在する思想の特質を指す。本研究は、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質を解明することで、創設メンバーが日本社会科の原型を創り出した過程の再評価をめざす。

従来の社会科教育史の領域で研究対象とされてきた学習指導要領は、文部省の著作物という性格上、創設メンバーの意図や願望が直接的に記されているわけではない。かといって、創設メンバーの戦前と戦後の論稿を研究対象とするだけでは、彼らの意図や願望を観念的・概観的にとらえてしまう恐れがある。そこで本研究は、創設メンバーの意図や願望を浮き彫りにするため、回想録なども対象とする。そのうえで、①創設メンバーは、カリキュラム論の思想の曖昧さという歴史的課題をどのように克服しようとしたのか②創設メンバーは、カリキュラム論の原理の難しさという教育的課題をどのように乗り越えようとしていったのか、の2点を中心に考察する。

第二節では、先行研究を検討することで、本研究の意義と特色を示した。本研究の領域は、教育学のなかの教科教育学、教科教育学のなかの社会科教育学である。具体的には、社会科成立史を対象とした社会科教育史研究に位置づく（片上，1993）。そこで、本研究の意義と特色を明らかにするために、社会科教育史の先行研究を検討した。先行研究は、主に3つの立場に分類できる。第一に、文部省から出された学習指導要領や教科書を対象とした制度史研究である。第二に、現場の教師が作成したプランや授業を対象とした実践史研究である。第三に、創設メンバーや民間教育団体の理論的指導者の社会科教育論を対象とした理論史研究である。

本研究は、創設メンバーの社会科教育論を対象としている点で、理論史研究に位置づけられる。研究の射程と対象という点では、田中（1981・1991）に近い。田中の研究の意義は、創設メンバーの社会科教育論の変遷を追究することで歴史的な到達点や課題を解明し、体系化の視点を明示したことである。他方、田中の研究は社会科教育の思想の概要を全体的・表面的に把握するレベルにとどまっているという見方もできる。

本研究の対象となる資料は、創設メンバーの思想的立場（人生における出来事や生活過程の経験）に関するものである。そこで、本研究の意義と特色を明らかにするために、創設メンバーの思想的立場を対象とした教育哲学・教育史学・社会科教育学の先行研究を検討した。研究方法論という点では、教育哲学は特定の人物、教育史学は複数の人物をそれぞれ対象とし、論稿における独自の言い回しやスタイルから分析する手法がとられてきた。ただし、いずれも教育史学研究や教育哲学研究の手法であり、社会科教育学研究としてどのような意

義があるのか、定かではなかった。社会科教育学の先行研究の場合も、同様であった。先行研究は、創設メンバーの論稿を思索の結果として扱うのではなく、当時の教育思潮と関連づけて、その過程を追究しているところに特色があった。しかし、教育史学研究や教育哲学研究の成果であり、社会科教育への直接的な示唆を見いだすことはできなかった。

先行研究の検討より、本研究の意義と特色は次の3点に集約できる。第一に、社会科教育史の先行研究が創設メンバーの論稿を文部省や学習指導要領の範疇でとらえていたのに対し、本研究は彼らが当時の社会科教育界における理論的指導者でもあったことをふまえ、提唱された社会科教育論の特質を明らかにしようと試みている点である。第二に、社会科教育史の先行研究が社会科教育の思想の概要、すなわち創設メンバーの社会科教育観を全体的・表面的に把握するレベルにとどまっているのに対し、本研究は彼らの社会科教育観とはどのようなものであり、形成する際の要因は何だったのか究明しようと試みている点である。第三に、創設メンバーの思想的立場を対象とした先行研究が教育史学研究や教育哲学研究の手法をとったのに対し、本研究は新たな領域と研究方法論を開発することで、従来の研究方法論の枠組みを修正し、体系化の糸口をつかもうと試みている点である。

第三節では、研究方法を示した。本研究では、次の研究方法をとった。第一に、中心人物として上田薫を設定し、彼とほかの創設メンバーの社会科教育論を比較させながら検討していくことで、社会科黎明期のカリキュラム論の展開を究明する。第二に、パラダイム・シフトの要因とされてきた教育的要因と政治的要因ではなく、心理的要因から分析することで、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界を考察する。ここでいう「心理的要因」とは、現場の教師の動向を指す。心理的要因から分析するためには、新たな研究方法を開発する必要がある。そこで第三に、当時の教育思潮と創設メンバーが社会科教育論を提唱する際にもちいた学問的アプローチを、戦略と戦術の関係に位置づける。ここでいう「戦略・戦術」とは、「民主主義社会の建設にふさわしい社会人を育て上げようとする」（文部省、1947：4）という目的を達成するために、創設メンバーがとった包括的・具体的な手段を指す。創設メンバーの戦略・戦術に基づいて心理的要因を分析することで、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界を解明することができる。

## 第一章

第一章では、社会科黎明期のカリキュラム論の類型化を示した。歴史的背景と先行研究の検討をふまえ、本研究の類型化の指標を設定した。本研究では、カリキュラム論の原理を指標として、社会科黎明期のカリキュラム論の類型化を行った。その際、社会科黎明期のカリキュラムをめぐる論争の焦点となった概念に着目した。

カリキュラム論の原理は、目標原理・内容原理・方法原理の3つに分けることができる。本研究では、①「目標原理型」②「内容原理型」③「方法原理型」の3類型を事例とした。類型①の「目標原理型」については、社会科における人間形成と道徳教育（以下、「人間形成」と「道徳教育」）を焦点とした社会科教育論を取りあげた。類型②の「内容原理型」については、総合社会科と分化社会科（以下、「総合」と「分化」）を焦点とした社会科教育論を取りあげた。類型③の「方法原理型」については、コア・カリキュラムと問題解決学習（以下、「コア」と「問題」）を焦点とした社会科教育論を取りあげた。

## 第二章・第三章・第四章

第二章では、「人間形成」と「道德教育」を焦点として上田薫と重松鷹泰の社会科教育論を比較させながら検討することで、「目標原理型」カリキュラム論の展開と思想的特質を示した。上田と重松の戦略・戦術に基づき、社会科を中心とした道德教育が崩壊した心理的要因を分析することで、「目標原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界を解明した。

第三章では、「総合」と「分化」を焦点として上田薫と勝田守一の社会科教育論を比較させながら検討することで、「内容原理型」カリキュラム論の展開と思想的特質を示した。上田と勝田の戦略・戦術に基づき、総合社会科が形骸化した心理的要因を分析することで、「内容原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界を解明した。

第四章では、「コア」と「問題解決」を焦点として上田薫と馬場四郎の社会科教育論を比較させながら検討することで、「方法原理型」カリキュラム論の展開と思想的特質を示した。上田と馬場の戦略・戦術に基づき、社会科の教育理論が転換した心理的要因を分析することで、「方法原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界を解明した。

## 終章

終章では、第二～四章までの分析結果をもとに、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質を示した。創設メンバーの戦略・戦術に基づき、パラダイム・シフトの心理的要因を分析することで、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界を解明した。

第一節では、第二～四章で解明されたカリキュラム論の3類型の思想的特質を総括することで、全体像を示した。「目標原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界は、現場の教師は理念として理解しながらも、抽象論であったために実践の枠組みで理解することができず、一部の教師を除いて授業に生かせなかったところにあった。「内容原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界は、現場の教師の世界観の衝突を招き、文学主義（生活主義）と科学主義の相克を生んだうえ、社会科の理念を阻む遠因となってしまったところにあった。「方法原理型」カリキュラム論の思想的特質と限界は、新教科として社会科の理念を掲げながらも、実際は教師の自主性に任せたがゆえ、かえって現場の軌道修正を図らざるを得ないという矛盾を抱えていたところにあった。

このように、社会科黎明期において理論的指導者であった創設メンバーの社会科教育論は、多少なりとも現場の教師に影響を与えていたものの、そのまま受け入れられたわけではなかった。実際、現場は創設メンバーの真意を測りかね、戦略・戦術（教育思潮・学問的アプローチ）を混同したため、不可能なことを催促されたように受け取った。創設メンバーの社会科教育論は、現場の教師にとって受け入れがたいものであり、あくまで理想論として受け止められた。結果として、多くの教師は短期的な成果に固執し、現実的な手段に依存することになった。

「民主主義社会の建設にふさわしい社会人を育て上げようとする」という目的を達成するために、創設メンバーがとった戦略・戦術は、イデオロギー闘争や教育運動の中で彼らの意図と反する結果を生んだことがわかった。

第二節では、本研究の総括をふまえ、結論を導き出した。創設メンバーの論稿に「誤解」や「難しい」といった表現が度々見られることから、社会科教育の普及や推進に苦慮していたことがわかる。他方、現場の教師の回想録に前向きな様子が綴られていることから、社会

科教育の啓蒙や高揚には成功していたという見方もできる。実際、これまで初期社会科の実践は、教師の自主性や主体性によって多種多様に生み出されたと積極的に意味づけられてきた。しかし、多くの教師にとって創設メンバーの思想は難解であり、一部の教師を除いて誤った解釈をされてしまった。現場の教師の自主性や主体性に委ねてしまったことが、かえって社会科教育の難しさに対する不満や不信感につながった側面もあった。

日本社会科の原型は、新教育としてめざすべき人間像と新教科として果たすべき役割という命題をめぐる、創設メンバーが鎬を削り合いながら創り上げられた。思想の葛藤と原理の矛盾という論争的な性格をもつがゆえ、創設メンバーの社会科教育観と連関して現場の教師の動向を左右したところに、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界があった。

第三節では、本研究の成果を示した。本研究の成果は、次の4点である。第一に、創設メンバーの論稿を中心とした思想的立場に関する資料を実証的・総合的に追究することで、彼らの社会科教育観の諸相と形成要因を明らかにしたことである。第二に、創設メンバーの社会科教育観に基づき、彼らが提唱した社会科教育論の特質と学問的アプローチの特色を考察することで、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界を解明したことである。第三に、解明した社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と関連づけてパラダイム・シフトの心理的要因を考察することで、日本社会科の原型が創り上げられた過程を再評価したことである。第四に、社会科教育史研究の新たな領域と研究方法論として、社会科教育思想史研究を開発したことである。ここでいう「社会科教育思想史研究」とは、社会科教育の思想的系譜を史実として対象化するような研究を指す。社会科教育思想史研究を行う意義は、①思想的立場に関する資料を実証的・総合的に追究することで、社会科教育観の諸相と形成要因を解明し、現代に求められる社会科教育観を樹立するための示唆を得る②カリキュラム論の思想的特質を解明し、日本社会科の原型の創造過程を再評価する視座を提供することで、社会科教育の新たな地平をきりひらく一助とする、の2点に集約できる。

第四節では、今後の課題と展望を示した。今後の課題は、次の2点である。第一に、本研究で事例とした3類型の思想的特質と限界を、本研究と同様の研究方法論をもちいて再解釈することである。第二に、黎明期以外の時期区分を対象とした研究を行うことである。

最後に、今後の展望について付言した。社会科教育史研究では、独自の仮説に基づいて新たな歴史的な解釈を明示することが求められ、数々の業績が積み重ねられてきた。しかし、本研究で示したように、創設メンバーの論稿に込められた意図や願望は、十分に汲み取られてきたとは言い難い。社会科教育思想史ならではの観点に基づき、今後も研究を継続することで、社会科教育学の発展に寄与していきたい。

## 引用文献

- 片上宗二（1993）『日本社会科成立史研究』風間書房。  
木村博一（2006）『日本社会科の成立理念とカリキュラム構造』風間書房。  
田中武雄（1981）『戦後社会科の復権』岩崎書店。  
田中武雄（1991）『社会科への可能性—生活と科学の論理—』あずみの書房。  
船山謙次（1964）『社会科論史』東洋館出版社。  
文部省（1947）『学習指導要領社会科Ⅰ編（試案）』東京書籍。